

○第 65 回中国・四国精神神経学会

日時：2025 年 11 月 27 日（木）・28 日（金）

会場：KDDI 維新ホール

会長：中川 伸（山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座）

1. 身体表現性障害やうつ病として加療されていた神経核内封入体病の 1 例

…………田中真之¹⁾，滝川寛之¹⁾，竹之下慎太郎²⁾，植田真司²⁾，渡部一予³⁾，寺田整司³⁾，酒本真次⁴⁾，高木 学⁴⁾ (1) 岡山大学精神科神経科，2) 岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科，3) 慈恵会慈恵病院精神科，4) 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学)

症例は 60 歳代女性。元来，ストレス負荷で嘔吐や食欲不振が生じやすい体質だった。X-1 年に嘔吐と食欲不振，排尿困難を生じ，総合病院内科で精査加療されたが，器質的異常は指摘されず，身体表現性障害疑いとして精神科病院に紹介された。当初は意欲低下や食欲不振などの症状から，うつ病と診断され薬物療法が行われたが改善はなかった。夜間を中心にせん妄様の見当識障害と疎通困難を繰り返し，頭部 CT で大脳白質と小脳脚に低吸収域を認め，頭部 MRI の拡散強調画像で皮髄境界の高信号域を認めた。X 年に当院を紹介され精査目的に入院し，遺伝子検査と皮膚生検の結果，神経核内封入体病と診断された。身体表現性障害やうつ病の症状とされた意欲低下や消化器症状，排尿障害は神経核内封入体病に関連した症状と考えられた。本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

2. 措置入院となった抗 NMDA 受容体脳炎の 1 例

…………楠目直紀¹⁾，野口勝宏¹⁾，三竿慧祐¹⁾，佐々木皓大¹⁾，岡田裕希²⁾，上野祐介¹⁾，樋笠直哉¹⁾，木戸瑞江¹⁾，石川一朗¹⁾，森 崇洋²⁾，角 徳文³⁾，中村 祐¹⁾ (1) 香川大学医学部精神神経医学講座，2) 香川大学医学部地域連携精神医学講座，3) 香川大学医学部臨床心理学科精神医学)

抗 NMDA 受容体脳炎は病初期に統合失調症類似の精神症状

が高率に生じる自己免疫性疾患である。症例は特記すべき既往歴のない 20 歳代後半の男性であり，急性発症の幻覚妄想を伴う錯乱状態となり，壁に頭を打ち付ける自傷行為があることから前医に措置入院となった。意識レベルの低下やけいれん発作，口腔内の不随意運動などを認めたため，身体疾患の精査目的に当院に紹介となり，器質性精神病疑いとして入院となった。髄液検査にて抗 NMDA 受容体抗体が検出され，抗 NMDA 受容体脳炎の診断となった。ステロイドパルス療法や血漿交換療法，免疫グロブリン大量療法を施行し，徐々に疎通性や理解力，意識レベルは改善し，転院後約 2 ヶ月で任意入院に変更し，その後自宅退院となった。本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

3. 幻覚妄想を認めた抗 LGI-1 抗体関連脳炎の 1 例

…………佐々木浩貴¹⁾，安田華枝¹⁾，山口 望²⁾，酒本真次³⁾，池田智香子¹⁾，鷲田健二¹⁾，寺田整司¹⁾，石津秀樹¹⁾，青木省三¹⁾，武田俊彦¹⁾ (1) 慈恵病院，2) 岡山県精神科医療センター，3) 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学)

症例は 70 歳代前半の女性，独居。既往に精神神経疾患はない。X 年 3 月より左手首の不随意運動が出現し次第に四肢にも拡大。幻視を疑う発言も認めた。A 病院で軽度認知障害 (HDS-R：26，MMSE：28) と単純部分発作の診断を受け抗てんかん薬を処方され不随意運動は改善したが，次第に幻覚妄想状態となり 10 月下旬当院入院。日内変動を伴う幻覚妄想と半年間での急速な認知機能低下 (HDS-R：13，MMSE：22) を認めた。脳波で δ burst や徐派の混入を認め，CT 所見では左側頭葉内側の低吸収域 (LDA) を認め器質性精神疾患を疑い 11 月下旬に B 病院へ転院。血清・髄液検査で抗 LGI-1 抗体陽性であり，抗 LGI-1 抗体陽性自己免疫性脳炎と診断。ステロイドパルス療法で精神症状が改善し，抗てんかん薬や抗精神病薬を中止しても再発なく退院できた 1 例を経験したため報告した。本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

4. 認知症診療における経皮吸収製剤の応用使用について

………今中章弘，高見 浩，福本拓治，小鶴俊郎，田中敬治，
坂尾良一，織田一衛（和恒会ふたば病院精神科）

認知症患者の行動心理症状に対しては，非薬物療法，薬物療法を含めた統合的な介入がなされる．薬物療法では，加齢による代謝機能の低下，遊離薬剤による血中濃度上昇，服薬遵守，嚥下機能の問題が顕在化してくる．今回，（1）不穏興奮で拒薬傾向の認知症症例，（2）アパシーや食欲減退を呈する認知症症例，（3）嚥下障害を呈した症例に，blonanserin, rivastigmine, rotigotine といった経皮吸収製剤の投与が有効であった症例を経験した．認知症に対して blonanserin と rotigotine は適用外使用であることを説明し，本人と家族から同意を得た．身体的な負担，薬剤相互作用，嚥下障害のあるケースでも使用しやすいといった点で経皮吸収製剤はメリットが大きく，QOL の向上に貢献するケースもあると考えられた．本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人および家族より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している．

5. 幻聴と被害妄想が前景に立った認知症の1例

………海老野佳穂¹⁾，野口勝宏¹⁾，大屋貴明²⁾，佐々木皓大¹⁾，
岡田裕希³⁾，上野祐介¹⁾，樋笠直哉¹⁾，木戸瑞江¹⁾，石川
一朗¹⁾，森 崇洋³⁾，角 徳文⁴⁾，中村 祐¹⁾（1）香川大
学医学部精神神経医学講座，2）医療法人社団以和貴会
いわき病院，3）香川大学医学部地域連携精神医学講座，
4）香川大学医学部臨床心理学科精神医学）

症例は 70 歳代女性．夫の死後独居．以前から物忘れがあったが X-1 年 11 月頃から金銭の管理ができなくなり，意欲の低下がみられた．同年 12 月に幻聴と妄想が出現，次男が近所の家にいると訴えだした．深夜に近隣住民宅を訪問し「次男を出してほしい」と喚くなど迷惑行為がみられたため X 年 1 月当科初診，医療保護入院となった．入院時は次男が近所の家にいるという妄想が強固で，近隣住民や次男の声の幻聴があり，それに対する独語が活発だった．認知機能低下があり（HDS-R：15/30，MMSE：14/30），頭部 MRI と脳血流 SPECT はアルツハイマー型認知症を疑う所見だった．ブレクスピプラゾールで幻聴，妄想の改善は認めなかったが家族の同意のもと，プロナセリン貼付剤に置換すると消退した．本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について家族より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している．

6. 認知症に伴う経口摂取不足による高 Na 血症が疑われた腎性尿崩症の1例

………岡本龍太郎，山下将平，金原 誠，高木彬宏，皆尾 望，
和田 健（広島県市立広島市民病院精神科）

症例は 70 歳代男性．X-20 年に双極症を発症し，当科に数回の入院歴がある．X-16 年以降は炭酸リチウム主剤に加療されていた．X-4 年以降は正常圧水頭症による認知機能低下が緩徐に進行し，施設入所となっていた．施設入所後も気分症状は安定，自発性低下が目立っていた．X 年 2 月に食事摂取量が減少し，血液検査で高 Na 血症を認め，食事・水分摂取不良による脱水症と考えられ，A 病院内科へ入院した．入院後は食事摂取良好だが，輸液補正を中止すると Na 値が再上昇するため，炭酸リチウムによる腎性尿崩症疑いとして精査目的で当科転院となった．転院後炭酸リチウムを中止し，各種負荷試験を行い腎性尿崩症と診断された．その後は利尿薬などの調整を行い，高 Na 血症は改善し，精神症状著変なく施設へ退院となった．本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人・家族より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している．

7. 急業により発作が再燃したてんかんに認知症が併存した1例

………日根野 清，吉野祐太，越智紳一郎，上野修一（愛媛大
学医学部附属病院精神神経科）

症例は 70 歳代前半の女性．10 歳代後半に症候性てんかんと診断され，カルバマゼピンおよびバルプロ酸でコントロール良好であった．60 歳代後半より物忘れが出現，徐々に進行した．X 年 2 月の受診時には，発作は認めなかったが，バルプロ酸血中濃度は低値であった．その後，治療中断となり同年 4 月てんかん発作重積のため，救急病院からの紹介で当院緊急受診し，診断確定および治療のため入院となった．脳波では棘徐波複合を認めたが，短期記憶障害からアルツハイマー型認知症，幻視や認知機能の変動からレビー小体型認知症の併存を疑い，精査の結果，複雑部分発作に混合認知症が重なっていると診断した．てんかん患者が高齢となった場合，認知症の発症に留意し，注意深い診察と環境設定の重要性をあらためて認識した．本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人および家族に同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している．

8. 昭和大学附属烏山病院が開発した自閉スペクトラム症専門プログラムに参加後の ASD 患者にみられた社会性の改善を予測符号化理論によって考察する

……吉本啓一郎，堀 月奈，小笠原庸行，高橋礼子，千代岡 司幸（特定医療法人一条会渡川病院）

昭和大学附属烏山病院が開発した自閉スペクトラム症専門プログラムは，障害特性の正しい理解やストレスへの対処法を学ぶ場で，同じ特性をもつ者同士で助言し合うピアサポートの場である．参加した患者の多くに社会参加の促進など社会性の改善が認められ，参加前後のコミュニケーションの特徴では「表出中心のコミュニケーションから理解中心のコミュニケーション」への変化が目立っていた．これを「脳は予測する装置であり，予測と実際の感覚入力との予測誤差を最小化することが脳の最も基本的な動作原則だとする予測符号化理論」に沿って解釈すると，同じ特性をもつ者同士の会話では定型発達者との会話に比べて予測誤差が少なく，その結果安定した心の状態で自分にとって有益な情報を受け取ることができ，希望する行動を取りやすくなっているのではないかと考察した．本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している．

9. 鳥取大学医学部附属病院精神科・児童思春期病床における運用と治療の取り組み

……山梨豪彦，岩田正明（鳥取大学医学部脳神経医科学講座精神行動医学分野）

編集委員会の判断により抄録掲載なし

10. 自傷痕が身体虐待として対処された，罪業妄想を伴う重症うつ病の 1 例

……稲野 秀，稲野靖枝（長門一ノ宮病院）

思春期はさまざまな精神疾患の発症時期であり，なかには虐待との鑑別が重要となる疾患も多い．このたび，自傷行為が先行し，虐待として対処された重症うつ病の 1 例を経験したので報告した．症例は 10 歳代後半，女兒．学校で「母から叩かれる」と訴え，腹部，背部に多数の色素沈着などの皮疹が確認されたため，虐待通告された．児童相談所に一時保護された後，不眠，「食べるな，食材がもったいない」といった幻聴を表明し，不食となった．身体管理が必要となり，児童相談所からの要請で，児童精神科専門病棟をもつ当院に緊急入院となった．治療経過中，皮膚病変は自傷痕であり，「虐待」はうつ病に伴う罪業妄想と判明した．当日は，診断経緯と，鑑別のポイントおよび課題について考察した．本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人および保護者より口頭および書面で同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している．

11. 当院の児童思春期病棟の動向—開設から 7 年をむかえて—

……稲野靖枝，稲野 秀（長門一ノ宮病院）

当院は開設 64 年の単科精神科病院である．2018 年 11 月に児童・思春期精神科入院医療管理料算定病床（以下，当病棟）30 床を開設した．当病棟の患児は，インターネット依存症，適応障害，複雑性 PTSD，うつ病，統合失調症，神経症性障害などのさまざまな精神疾患を主訴に入院してくる．大半に発達障害が併存し，さらに強度行動障害状態も併存している．当病棟では，多職種協働による治療プログラムを作成して，患児らを治療している．このプログラムは，行動療法，認知行動療法，SST，精神科作業療法，認知機能強化訓練，構造化などを組み合わせて作成しており，患児らの状態改善に一定の効果をあげている．当日は当病棟の 7 年間の動向と，治療プログラムの効果と課題について考察し発表した．本発表に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人および保護者より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している．

12. 神経発達症の存在が発症に関係したと考えられた短期精神症の1例

………濱江弘太郎，兼子幸一（社会医療法人仁厚会医療福祉センター倉吉病院）

症例は40歳代後半の男性。精神科受診歴はない。X年5月に明らかなストレス因子の存在なく、「近隣住民が騒音を出して自分を攻撃する」といった幻覚妄想状態を呈し、幻聴から逃れるために車道へ飛び出す自殺企図があり、当院入院となった。意識混濁や意識内容の変容は認めなかった。入院後、保護的環境の提供とプロナセリン主剤の薬物療法を開始したところ、入院10日目までに精神病症状は寛解した。本人側の要因や環境要因が病態に寄与した可能性を考え、詳細な生育歴の聴取や心理検査を行い、自閉スペクトラム症の発達特性を伴う軽度知的発達症が短期精神症の背景に存在する可能性が示唆された。発表当日は、聴取した発達歴や心理検査の結果をふまえて診断に関する考察を行った。なお、本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮した。

13. 多彩な精神症状を呈した脳脚性幻覚症の1例

………滝川寛之¹⁾，守安江梨伽¹⁾，矢野峻伍^{1,2)}，竹之下慎太郎³⁾，植田真司³⁾，酒本真次⁴⁾，高木 学⁴⁾（1）岡山大学病院精神科神経科，2）岡山県精神科医療センター，3）岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科，4）岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学）

症例は50歳代女性。急性の要素性幻視（色鮮やかな幾何学模様）、要素性幻聴（機械音や物音）、監視されているという被害妄想、嗅覚過敏、睡眠障害が数日の経過で出現した。左上肢不全麻痺と左方注視時の複視を認め、頭部MRI拡散強調画像で右中脳に高信号域を検出した。中脳梗塞による脳脚性幻覚症と診断し、抗血小板薬による脳梗塞再発予防治療を開始した。併せて適用外使用の旨を説明し同意を得たうえで数種類の抗精神病薬を使用するも、効果は限定的で精神症状は持続した。しかし、丁寧な病状説明と支持的精神療法で患者の不安は軽減され、症状と付き合いながら日常生活へ復帰可能となった。脳脚性幻覚症の主症状である鮮明な幻視に加え、幻聴や妄想など多彩な精神病症状を合併した点で臨床的な示唆に富む1例である。本報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

14. 左側頭極の顕著な萎縮から意味性認知症が疑われたが非典型的な失語症状を呈し、診断に難渋した1例

………竹内綾香，下條将輝，藤戸良子，茶谷佳宏，森田啓史，数井裕光（高知大学医学部神経精神科学講座）

【症例】70歳代女性，右利き。X-6年に乳癌が判明した頃から不安症状が出現し，近医の精神科に通院していた。X-1年11月頃から言葉の出にくさを訴えるようになり，X年1月に撮像した頭部CTでは左側頭極の萎縮を認めた。意味性認知症が疑われ，X年3月に当科を紹介受診した。意味記憶障害は目立たず，喚語困難が顕著であり，復唱障害，書字の脱落，音韻性錯語，失文法を認めた。MMSEは20点（見当識-1，Serial-7-4，復唱-1，三段階命令-3，書字作文-1）であった。症状からアルツハイマー病などを背景としたロゴペニック型進行性失語や，大脳皮質基底核変性症を鑑別に挙げて精査を行った。当日は，神経心理検査，脳脊髄液検査等各種検査結果をもとに症状を再考し，関連文献をふまえた考察を加えて報告した。本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人・家族より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

15. 幻視に伴う行動異常の顕在化を契機に精神科入院となったレビー小体型認知症の症例検討

………広瀬 彩（鳥取大学医学部付属病院精神科）

レビー小体型認知症（DLB）では精神症状が生活上の支障の主要因となりうる。われわれは幻視に影響された行動上の問題に対して入院加療を行った症例を経験した。症例は80歳代女性。X-3年より物忘れが出現し，X-2年のSPECT検査では特異的な所見は認めなかった。X年，幻視および被害妄想により近隣住民に苦情を呈する行動があり，当院に任意入院となった。明瞭な幻視やDAT-SCANでの右被殻優位の集積低下からDLBと診断しドネペジルを開始した。入院中も幻視は持続したが自宅でみられたような不穏行動は認めず，介護保険サービスを調整し自宅退院となった。DLBではアセチルコリン神経の脱落が幻視などに関連し，ドネペジルが認知機能のみでなくDLBの神経精神症状の改善にも有効であることが臨床試験でも示されている。なお，本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人・家族より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

16. 親族とのトラブルを契機に幻覚妄想状態を呈したレビー小体型認知症の1例

……金原 誠, 和田 健, 皆尾 望, 高木彬宏, 山下将平, 岡本龍太郎 (広島市民病院精神科)

レビー小体型認知症 (DLB) は, 認知機能障害に加え, 幻覚妄想などを呈することがあり, 老年期発症の精神病と誤診されることがある。今回, 親族とのトラブルを契機に幻覚妄想状態を呈し, レビー小体型認知症と診断された1例を経験したため, 文献的考察を含めて報告した。症例は70歳代女性。遺産相続を契機にX年4月初旬より幻視や被害妄想を呈した。老年期精神病との診断で抗精神病薬が開始された。症状は軽快したが, 体動困難となり, 抗精神病薬への過敏性によるパーキンソニズムを疑い, 精査加療目的にX年6月に任意入院した。認知機能低下やMIBG心筋シンチグラフィでの取り込み低下などからDLBと診断した。本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人と家族より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

17. 相貌失認や語義失語, 同定障害を伴い, 意味性認知症と診断した症例

……高橋優斗¹⁾, 森 崇洋¹⁾, 岡田裕希¹⁾, 佐々木皓大²⁾, 上野祐介²⁾, 野口勝宏²⁾, 樋笠直哉²⁾, 木戸瑞江²⁾, 石川一朗²⁾, 角 徳文³⁾, 中村 祐²⁾ (1) 香川大学医学部地域連携精神医学講座, 2) 香川大学医学部精神神経医学講座, 3) 香川大学医学部臨床心理学科精神医学)

症例は70歳代女性。X-2年から徐々に人や物の名前が思い出せなくなり, 近医受診したが認知症の診断には至らず。X年に上記症状に加え, 執着が強いなど行動障害が出現し再診, 精査目的で当院初診となった。初診時, 見当識, 近似記憶障害は認めず。発話は流暢で発話量も保たれていたが, 相貌失認や語義失語, 同定障害などを認めた。MMSEは29点, HDS-Rは29点, FABは13点。MRIは右側優位の側頭葉前方から底面に萎縮を認め, SPECTは右大脳血流低下, 側頭葉変化が目立った。患者から治療法があればと希望があり, アルツハイマー型認知症のvariantの可能性を考慮しアミロイドPETを施行し陰性であった。語義障害を認め, 画像所見とあわせて意味性認知症 (SD) と診断した。SDは認知症全体でみても稀であり, PETも施行した症例であるため報告した。本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人および家族より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

18. 経過中に神経性やせ症を合併した慢性期統合失調症の1例

……加藤庸介, 中村玉美, 市原早紀, 水本智大, 野田稔子, 樋口文宏, 中川 伸 (山口大学医学部附属病院精神科神経科)

【目的】統合失調症における神経性やせ症の合併は前駆期に多いとされるが, 今回, 慢性期に合併した症例を経験したので報告した。【症例】40歳代女性。20歳代で統合失調症を発症したが未治療で経過した。弟が糖尿病で逝去後にダイエットを開始し, 急激な体重減少に伴いやせ願望や肥満恐怖が出現し, さらに「食べると殺される」など食事を制限する幻覚妄想が出現した。BMI 13 kg/m²まで体重減少したため当科入院した。抗精神病薬と行動療法を用いた栄養療法を平行して行ったところ病状が改善し, 目標体重を達成したため退院, 外来でも改善を維持している。【考察】慢性期統合失調症に神経性やせ症を合併した症例では, 薬物療法と行動療法の併用が有効である可能性が示唆された。【倫理的配慮】本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

19. 過量服薬による入院を契機に薬剤調整に成功した若年発症の統合失調症の1例

……水谷雄一¹⁾, 馬場悠花里¹⁾, 中村有香²⁾, 植田真司²⁾, 酒本真次³⁾, 高木 学³⁾ (1) 岡山大学病院精神科神経科, 2) 岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科, 3) 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学)

症例は10歳代女性。X-2年より不登校がありX-1年10月に当院小児科を紹介された。小児科受診時, 注察妄想, 被害妄想を認めたため当科を紹介受診した。統合失調症の初発を疑い同日よりアリピプラゾール (APZ) 1 mgを開始した。増量するも眠気が強く3 mgにて維持していたが精神症状は残存していた。X年5月, 市販薬の過量服薬 (鎮咳薬60錠) にてA病院へ入院となった。同院の入院中, 滅裂な言動があり当院当科へ転院, 医療保護入院となった。入院後APZ 24 mgまで漸増し精神症状は改善を認めた。市販薬乱用について背景にある本人の苦痛感を共有したうえで家族を交え今後の対応について協議した。10歳代の市販薬依存は年々増加しているとの報告もあり, 精神科外来においても注意が必要である。報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人, 保護者より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

20. 認知症をはじめとする器質性精神障害との鑑別を要した 最遅発性統合失調様精神病 (very late-onset schizo- phrenia-like psychosis : VLOSLP) の1例

……赤尾玲実, 赤松正規, 森田啓史, 藤戸良子, 数井裕光 (高知大学医学部神経精神科学講座)

症例は80歳代女性。X年Y月、隣家で組織的な性的虐待が起っていると訴え始めた。その後「自宅の床下に穴が掘られて人が勝手に入っている」という妄想や、音楽性幻聴が出現した。Y+2月に当科入院。入院後も同様の訴えが持続した。MMSE 25点で、記憶障害、見当識障害、視空間認知障害は認めず、パーキンソニズム、認知機能変動、レム期睡眠行動障害も明らかではなかった。嗅覚低下、自律神経症状も目立たなかった。頭部MRIでは、側頭葉内側部も含め萎縮は目立たなかった。脳血流SPECT、イオフルパンSPECTはすべて正常所見であった。VLOSLPと診断し、プロナンセリン貼付剤で治療開始したところ幻覚妄想に奏効し、医療介護サービスを導入し自宅退院の方針とした。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人の同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

21. 入院中にオープンダイアログを行い効果的であった強い妄想を抱く統合失調症患者3例

……北代晶帆, 三井勇輝, 赤尾 敦, 中村朔也, 船越祥子, 大原伸騎, 土田亜希, 澤田 健 (高知県・高知市病院企業団立高知医療センターこころのサポートセンター)

当院では、強い妄想を呈し従来の治療が困難な統合失調症患者に対し、オープンダイアログ (OD) を導入している。本報告では、入院中にODを実施し改善が得られた20~50歳代の3例を紹介する。関係妄想、被害妄想、宗教妄想を示し、薬物療法や面接で効果が乏しかったが、入院初期から多職種チームでODを定期実施し、家族も参加した。妄想の明確化や情動共有が進み、自己理解と信頼関係が深まった。全例で症状が緩和し、外来通院を継続している。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

22. 救命救急センター受診後の10歳代女性自殺未遂者3症例 における精神保健福祉センターとの自殺未遂者支援連携

……三井勇輝, 澤田 健, 土田亜希, 大原伸騎, 船越祥子, 北代晶帆, 中村朔也, 赤尾 敦 (高知医療センター精神科)

当院では精神保健福祉センターとの自殺未遂者支援事業により、救命救急センター受診後の継続的な自殺予防ケア体制を構築している。10歳代女性自殺未遂者3症例への支援を通じて効果的な連携モデルを検討した。薬物過量摂取、自傷行為、衝動的自殺企図で搬送された10歳代半ばの女性自殺未遂者3症例を対象とした。入院早期より精神科コンサルテーションと自殺未遂者支援事業に基づく連携を開始し、退院後は外来通院と精神保健福祉センター介入を並行実施した。自殺未遂者支援による継続的介入により早期発見・対応が可能であった。医療機関と精神保健福祉センターの自殺未遂者支援事業による早期介入と継続的支援が、10歳代自殺未遂者の効果的な地域移行に寄与した。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人および保護者より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

23. 医療観察法施行20年を迎えて—当院における医療観察法 病棟運用の現況と展望—

……磯村信治, 兼行浩史 (山口県立こころの医療センター)

2005年施行の『医療観察法』は本年で20年経過する。当院では2011年にまず既存病棟内の2床で運用開始した後、2013年開棟した「きらら病棟」で8床の運用を開始した。運用14年半で50名の対象者を受け入れ、うち24名が県外からの対象者であった。36名が家族との同居や施設入所となり社会復帰につながった。平均在院日数は約1,100日で全国平均より短い長期化が課題である。『医療観察法』による支援は、医療のみならず司法・行政・福祉との密接な連携が不可欠であり、対象者が退院後も地域社会の中で安心して生活できる環境の整備が継続的に図られている。本学会のテーマ「リカバリーを支える包括的な地域医療の在り方を探る」とも通じるものだが、発表ではこれまでの「きらら病棟」運用状況を振り返り、課題・展望を報告した。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について、本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

24. 飲酒下での自殺の社会経済的・医学的特徴の検討—山口県における法医学解剖事例の調査より—

………角光慧美¹⁾，姫宮彩子²⁾，松原敏郎³⁾，高瀬 泉²⁾(1) 山口大学医学部医学科，2) 山口大学大学院医学系研究科法医学講座，3) 山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座)

本研究では法医学解剖事例を対象に飲酒と自殺の関連について調査した。対象は、2020～2024年に山口大学法医学講座で実施された解剖事例のうち、自殺と判断ないし疑われた111例とした。血中アルコール濃度に基づいて分類した非飲酒群と飲酒群について、社会経済的・医学的特徴を統計学的に比較検討した。飲酒群(26例)は非飲酒群(58例)と比較し、若年者・有職者・喫煙者が有意に多く、男性・習慣飲酒・対人問題が多い傾向を示し、自宅から発見場所までの距離が長い傾向を示した。一方、自殺手段(死因)、遺書・自殺の予兆・希死念慮・自殺関連行動歴、身体・精神疾患の受診歴などについては2群間で差を認めなかった。統計的には飲酒群に有意に高い衝動性を認めなかったが、血中1.0 mg/mL以上を示す事例は少なく、継続した調査研究が必要である。本研究は山口大学臨床研究倫理審査委員会の承認を受けて実施し、本報告に際し、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

25. 糖尿病患者の意識障害と不明熱の原因として高浸透圧性高血糖症候群による高Na血症が疑われた1例

………江副由佳，村上伸治，小笠原康人，本間好花，後藤信太郎，田中賀大，宮崎哲治，石原武士(川崎医科大学附属病院精神科学教室)

本症例は40歳代女性。2年前にうつ病にて通院したが経過中断。2ヵ月前より徐々に抑うつや食欲不振が認められたため精神科A病院を受診し、不安や希死念慮が認められたため医療保護入院となった。入院3日後から38℃の熱発があり膿尿から尿路感染症を疑われ抗生剤が開始され、4日後の血液検査で炎症反応は改善したが40℃前後の不明熱が継続し、意識障害も出現した。単純CTや髄液検査でも熱源となるような異常所見は認められず、原因精査目的で総合病院である当院へ緊急転院となった。転院時の血液検査にて随時血糖値412 mg/dLと血清Na 166 mEq/Lを認めた。補正後解熱したが意識障害が遷延した症例を経験したため報告した。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報をプライバシーの保護に十分配慮している。また、本演題に関して開示すべき利益相反関係にある企業はない。

26. 身体科との緊密な連携により診断と精神科治療介入を行い得た自己瀉血による作為症の1例

………守安江梨伽¹⁾，矢野峻伍^{1,2)}，滝川寛之¹⁾，竹之下慎太郎³⁾，中村有香³⁾，藤原雅樹³⁾，植田真司³⁾，清家圭介⁴⁾，高木 学⁵⁾(1) 岡山大学病院精神科神経科，2) 岡山県精神科医療センター，3) 岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科，4) 岡山大学病院血液・腫瘍内科，5) 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学)

貧血で長期間加療されていた作為症の1例を報告する。症例は20歳代女性。医療系大学在学中より、原因不明の重度貧血に対する治療のため何度も輸血加療を受けていた。X-1月、精査のため当院血液内科に入院。貧血の持続に加え、不自然な菌血症を反復したため、作為症が鑑別に挙げられた。患者は否定を続けていたが、病室から血液の付着した注射針が発見されるなど自己瀉血が疑わしい状況を認めた。X月、内科との緊密な連携のもと精神科へ転科したが診断への抵抗が強い状況が続いていた。しかし、最終的には安定した治療関係の構築を通じて自己瀉血を吐露し、自身の衝動や内面と向き合えるようになった。作為症は診断および精神科への紹介や治療に難渋することがあり、精神科と身体科のより密な連携が重要である。本報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

27. 精神症状により身体的治療に意思決定支援を要した2症例

………山口雄大，青木真理子，吉田結理，中山知彦，中瀧理仁，沼田周助(徳島大学病院精神科神経科)

精神症状のために身体的治療に意思決定困難を呈した患者に対して多職種で意思決定支援を行い、治療の同意へ至った2症例を報告した。症例1は妄想性障害により末期腎不全の透析治療への意思決定が困難な男性。妄想症状はプロナセリン40 mgで治療した。精神科医、腎臓内科医、看護師、精神保健福祉士にて連携し、再度患者へ丁寧な説明した結果、同意が得られ透析導入に至った。症例2は抗精神病薬の自己中断により再燃した統合失調症の女性。幻覚妄想状態はオランザピン20 mgにて改善したが、乳がんの検査・治療に関する妄想は残存した。患者、家族、看護師、精神保健福祉士、乳腺外科医、精神科医にてカンファレンスを行い、再度患者へ丁寧な説明した結果、治療への意思を示し、検査開始に至った。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

28. メトホルミンは術後せん妄と死亡リスクに影響を与えるか—後ろ向きコホート研究—

……………梶谷直史¹⁾，山梨豪彦¹⁾，吉岡大祐^{1,2)}，小松弘二¹⁾，西口毅¹⁾，岩田正明¹⁾ (1) 鳥取大学医学部脳神経医学講座精神行動医学分野，2) 養和病院精神科)

【目的】先行研究 (Yamanashi et al. 2022) では，メトホルミン (Met) がせん妄の有病率低下や死亡率低下に関連する可能性が示唆されたが，併用薬や直近の Met の使用状況を考慮していない限界が存在したため，それらを克服できるよう患者背景や手術データを考慮した調査を行った。【方法】悪性腫瘍手術を受けた 65 歳以上の 2 型糖尿病患者 1,159 例を対象に後ろ向きコホート研究を実施した。【結果・結論】1,026 例が Met 非使用群，133 例が Met 使用群に分類された。交絡因子を調整して解析したところ，Met 使用はせん妄リスクや死亡率低下と有意な関連を示さなかった。本研究は鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した後ろ向き研究である。対象患者からの個別同意はオプトアウト方式により対応し，研究情報を院内掲示・ホームページにて公開し，拒否の機会を保証した。データは匿名化され，個人を特定できる情報は含まれていない。

29. 肺癌を発症した統合失調症患者に化学療法を開始するためクロザピンを中断した 1 例

……………本間好花，高橋 優，武藤 遙，和辻健太，江副由佳，小笠原康人，石原武士 (川崎医科大学精神科学教室)

クロザピンは治療抵抗性統合失調症に唯一有効性が認められている抗精神病薬であるが，重篤な副作用として無顆粒球症が挙げられている。一方，がんの化学療法についても，治療過程で骨髄抑制が発生し血球減少を起こすことが知られている。これらのことから「化学療法等の骨髄抑制を起こす可能性のある治療中の患者」にクロザピンは禁忌となっており，化学療法を実施する場合は精神症状の再燃を考慮したうえでクロザピンを中断する必要がある。しかし，クロザピンを投与中の患者に化学療法が必要となった症例の国内報告は少ない。今回，60 歳代男性の統合失調症患者が肺癌を発症し，クロザピンを中断して化学療法を開始した症例を経験したので報告した。なお，本症例報告に際して，発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており，個人情報とプライバシーの保護に十分配慮している。また，本演題に関して開示すべき利益相反関係にある企業はない。

30. 山口県の DPAT 活動のこれまでの活動実績と，今後の展望と課題

……………角田武久¹⁾，新川甲太²⁾，萩原康輔²⁾，藤田 実¹⁾，兼行浩史¹⁾ (1) 山口県立こころの医療センター，2) 山口大学医学部精神科神経科)

山口県立こころの医療センター (以下，当院) は，東日本大震災 (2011 年) では，山口大学と協働して，こころのケアチームとして活動を行った。2016 年の熊本地震が初めての山口県 DPAT の活動で当院 1 チームが本震前に現地入りし 3 日間活動した。その後，各職種のメンバーが DPAT 事務局主催の研修会に参加し，DPAT 隊員を増やしていった。2018 年の西日本豪雨と 2020 年の熊本豪雨でも，当院の 1 チームが活動した。2024 年の能登半島地震では石川県庁内の DPAT 調整本部で活動した。山口県内では当院以外の体制整備が進んでいなかったが，2024 年 11 月には初めての山口県ローカル DPAT の 1 日研修を開催し，7 病院 8 チームが参加し，県ローカル DPAT の育成を開始した。2025 年 11 月には DMAT 合同の中国地方実動訓練を実施した。山口県の DPAT はまず量的な不足があり，研修会を通じてチーム数を増やすことが課題である。発表にあたり，患者などの個人名の記載なく倫理的配慮を実施している。

31. 山口県精神科救急医療システムの現状と課題

……………原賀健一，角田武久，磯村信治，藤田 実，兼行浩史 (山口県立こころの医療センター)

山口県では 2000 年 7 月から，精神科救急医療体制整備事業 (1995 年～) に沿って，県精神科病院協会の協力のもとに精神科救急医療システムを運営してきた。当院内の精神科救急情報センターでトリアージを行い，県内の 3 ブロックに輪番病院を設け，当院が常時バックアップしている。整備事業の運営状況には，各自治体の人口や医療資源の分布などによって大きな地域差があるため，実績調査や評価基準，ガイドラインの作成が進められ，体制の均てん化や再構築がめざされている。評価基準では，医療体制の原則 (アクセス性，地域包括性，公平性，一貫性，ケアの継続性など) や，圏域，受診前相談，搬送体制，身体合併症連携体制などの項目が重視される。本発表では，本システムの運用状況 (2024 年度 346 件) と，25 年間に改善してきた経緯を報告するとともに，今後の課題を提起した。発表について当院の倫理審査委員会で承認を得た。

32. 自殺企図から行政への通報につながった高齢者虐待の1例

……小林正明¹⁾, 山科貴裕¹⁾, 河崎玲音²⁾, 江島悠太²⁾, 賣豆紀晶洋²⁾ (1) 山口県立総合医療センター神経科, 2) 山口県立総合医療センター救急科)

近年, 高齢者への虐待は社会的課題となっており, 本邦では『高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律 (通称高齢者虐待防止法)』が2006年4月1日に施行されている。今回われわれは入水による自殺企図で救急搬送され, 明らかに過去のものと考えられる打撲痕から虐待を疑った高齢女性の治療を経験した。救急外来で本人から聴取した病歴と, 執拗に面会を求める家人の様子から虐待案件と判断し, 高齢者虐待防止法に基づき行政へと通報した。その結果, 速やかに行政の介入が行われ, 本人の養護者との分離希望が確認され施設入所へとつながった。当日は文献的考察を加えて報告した。また, 本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

33. 神経性無食欲症の入院治療中に「にがり」を過剰摂取し高カリウム血症を呈した1例

……江草純和, 村上伸治, 田中賀大, 浅野宇貴, 白形鷹博, 澤原光彦, 石原武士 (川崎医科大学医学部精神科学教室)

症例は30歳代女性, X-10年ごろからダイエットをきっかけに神経性無食欲症を発症した。X年3月中旬, 食事栄養療法を目的に当科へ入院した。入院時, 身長165 cm, 体重30 kg (BMI 11)。低栄養による弛緩性便秘を認めており内服調整を行っていたが排便への強いこだわりから市販のにがりを持ち込み使用していた。X年4月初旬, 気分不良を訴えたため血液検査を施行したところ血清K値7.2 mEq/Lと高値を認めたため点滴治療を行ったところ血清K値は正常化した。後日の問診でにがりの過剰摂取が判明した。神経性無食欲症患者の治療経過中に高K血症をはじめ電解質異常を認めた際ににがり使用の有無を確認することが肝要である。本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。また, 本演題に関して開示すべき利益相反関係にある企業はない。

34. 自閉スペクトラム症を合併し, 治療に難渋した神経性やせ症の1例

……佐々木太珠¹⁾, 横出晃能¹⁾, 李 大賢²⁾, 千田真友子³⁾, 中西一秀⁴⁾, 植田真司³⁾, 高木 学⁵⁾ (1) 岡山大学病院精神科神経科, 2) 岡山大学学術研究院医療開発領域卒後臨床研修センター, 3) 岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科, 4) 岡山県精神科医療センター, 5) 岡山大学学術研究院医歯薬領域精神神経病態学)

症例は10歳代半ばの女性。X-11年に自閉スペクトラム症 (ASD), X-4年に神経性やせ症 (AN) と診断された。X年に体重30 kgまで減少し, 当院に医療保護入院となった。行動制限表を用いて栄養療法を開始したが, 目標体重による長期的な報酬では行動変容にはつながりにくく, やせ願望に加えて時刻表的な生活様式への固執が存在し, 食事内容の変更などがあると混乱して癇癪を繰り返した。病棟管理上の限界や規則に対して他者視点を欠いた要求の拡大もみられたが, 栄養形態の工夫について本人の意見を採用したところ, 「自分の決めたことは達成する」という特性に合致して治療への協力が得られるようになった。ASDを合併したANにおいては発達特性に配慮した個別的な対応が重要であると考えられた。本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人および保護者より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

35. 極端な低体重を呈した回避・制限性食物摂取症 (ARFID) に対し, オランザピンが有効であった1例

……三船義博, 坂井大五, 三木洋介, 志田みなみ, 大西睦美, 平田仁美, 横村 真, 今井秀記, 鴨居鈴委子, 藤井 聡, 三船和史 (医療法人社団三愛会三船病院)

症例は30歳代女性。X年4月, 食事のどに詰まった体験を契機に摂食量が低下し, 約2ヵ月で8 kgの体重減少を認め, X年6月当院に入院。ボディイメージの障害ややせ願望はなく回避・制限性食物摂取症 (ARFID) と診断。入院時の体重は33.8 kg (BMI 12.8) と著明な痩を認め, 点滴と経口摂取を併用したが改善なく, 第22病日より鼻腔栄養を開始。不安・焦燥感が強く, 大声や奇声を認めたため, 適用外使用としてオランザピンを導入後, 精神面は安定し, 経口摂取が可能となり, 鼻腔栄養から離脱。X年10月には体重が40.4 kg (BMI 15.3) まで回復し, 第133病日に退院。本症例では, オランザピンが不安・焦燥感軽減に有効で, 食事摂取と体重回復に寄与したと考えられる。本症例報告に際しては, オランザピンの適用外使用であることを含め, 本人に十分な説明を行い, 文書による同意を得た。また発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保

護に十分に配慮した。

36. MANTRAの家族セッションを行ったことで本人からは高い満足感、家族には疾病の理解と患者との生活への不安の軽減を得られた神経性やせ症の1例

……………中島瑠子¹⁾、石田真璃^{1,2)}、馬場悠花里¹⁾、井上尚子³⁾、中村有香⁴⁾、千田真友子⁴⁾、植田真司⁴⁾、高木 学⁵⁾(1) 岡山大学病院精神科神経科、2) 公益財団法人慈圭会慈圭病院、3) 岡山大学病院医療技術部臨床心理部門、4) 岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科、5) 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学)

Maudsley Model of Anorexia Nervosa Treatment for Adults (MANTRA) は、NICE ガイドラインにおいて成人神経性やせ症に対する第一選択の治療法の1つである。症例は20歳代女性。過食嘔吐が悪化し重度の低体重になり入院した。栄養療法を行い、BMI 15に回復した時点でMANTRAを開始した。次第に病気の外在化が進んだが、本人の家族への葛藤は強く、家族も本人への接し方に苦労している様子があったため、家族セッションも併行した。その結果、疾患を理解しようとする家族の姿勢を見たことで治療や退院後の生活に対し前向きになる様子が認められた。家族からも疾患への理解と接し方の不安の軽減に対して満足感が得られた。家族セッションの導入によって治療や退院後の生活に対して効果を認めた症例を報告した。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

37. 家族力動に着目した入院中の介入が奏功した児童思春期神経性やせ症の1例

……………篠原貴大、水本智大、市原早紀、中村玉美、野田稔子、樋口文宏、中川 伸(山口大学医学部附属病院精神科神経科)

【目的】近年、児童思春期の神経性やせ症(AN)の入院患者が増加しているが、入院中の精神療法に明確な第一選択はない。今回、家族力動に焦点をあてた介入が奏功した1例を報告した。【症例】10歳代女児。不仲な両親のもとで抑圧的に育った。X-1年5月から過剰な食事制限を行い低体重となり、同年12月に当科を初診しANと診断された。母親は完璧主義で本人と密着し喧嘩が絶えず、父親は育児を母親に任せきりであった。X年10月にBMI 12 kg/m²台となり、当科に医療保護入院となった。家族力動の理解に基づき週2回の家族面談を行い、家族関係の改善に伴って本人の病状も改善した。【考察】児童思春期の入院治療においては、家族機能への積極的介入が奏功する症例が存在することが示唆された。【倫理的配慮】本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開

について本人と保護者より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

38. 入院治療による行動制限療法により早期に神経性無食欲症の症状の消失に至った1例

……………三輪田高房、久門啓志、山崎聖広、越智紳一郎、伊賀淳一、上野修一(愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学)

神経性無食欲症は、低栄養状態に加え肥満恐怖ややせ願望などを呈する病態である。今回、最重度の症例において、比較的早期に症状の改善を経験した。症例は10歳代半ばの女性。ダイエット目的で食事制限を開始し、4ヵ月後に無月経、10ヵ月後に極度のい痩となり当院当科を受診した。初診時体重28.3 kg、BMI 11.7でやせ願望や肥満恐怖、ボディイメージの歪みを認め、神経性無食欲症の診断で同日医療保護入院となった。当初は経口摂取が進まず、隔離・身体拘束のうえ、経管栄養を行った。受容的に接しながら行動制限療法を開始し、疾病教育と並行し食事量を徐々に増やした。体重増加に伴い、肥満恐怖、ボディイメージの歪みは比較的早期に改善し、入院4ヵ月後に体重39.2 kg、BMI 16.2で退院となった。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人、保護者より同意を得ており個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮した。

39. 中国地方から取り組む、精神障害者に対するがん検診勧奨法の実装研究

……………藤原雅樹¹⁾、山田裕士²⁾、高木 学³⁾、稲垣正俊⁴⁾(1) 岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科、2) 積善病院、3) 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学、4) 島根大学医学部精神医学講座)

統合失調症患者のがん検診の格差は世界的な課題である。われわれは精神科病院の外来スタッフによる個別のがん検診勧奨法を開発し、無作為化比較試験で効果を確認した。この勧奨法を日常診療下で提供可能とするために、勧奨実施ガイドや教育資料などの実装戦略を開発した。今回、このプロバイダレベルの実装戦略に沿って日常診療下で勧奨法が実施可能かどうかを検討するACCESS-2試験を行った(岡山大学倫理委員会承認済)。6病院の医療者を介入対象とし、ガイドおよび教育資料を提供した。ガイドに沿い、2022年度に40/50/60歳を迎える外来統合失調症患者へ勧奨を行うことを目標とした。対象者への勧奨実施割合にはばらつきがあったが、5病院で目標とした40%を達成した。全施設で実装戦略が計画通りに遂行されていた。現在は、検討した地域レベルの実装戦略に基づいて、中国地方の精神科病院に勧奨法の採用を呼び掛けるACCESSプロジェクトを2024年より実施している。

40. 山口産業保健総合支援センターでの産業保健相談員の相談業務についての報告

……角田武久¹⁾、藤田善政²⁾(1) 山口県立こころの医療センター、2) 山口産業保健総合支援センター)

厚生労働省事業で2014年4月に山口産業保健総合支援センターが設置された。14業務があり、産業保健関係者への専門的研修/メンタルヘルス教育普及/治療と仕事の両立支援の教育普及/産業保健啓発セミナー/産業保健の事例検討会/産業保健関係者からの専門的相談対応/相談員による専門的実地相談/メンタルヘルス対策の個別訪問支援/治療と仕事の両立支援の普及促進支援/治療と仕事の両立の個別相談/小規模事業場における産業保健活動支援/産業保健活動推進助成金/産業保健に関する情報提供/産業保健に関する調査研究と多岐にわたる。発表者は2016年4月から勤務し、産業保健関係者への専門的研修として年間3回の講演を実施、産業保健関係者からの専門的相談対応として月に2回2時間枠で主に企業の人事労務担当者や産業看護職に対して相談業務を実施している。今回は主にその相談業務の実績などにつき報告した。倫理的側面に配慮し個別事例には触れていない。

41. 多職種へ疾病理解を促すことで周産期からの支援体制を継続することができた発達障害の1症例

……長濱道治、河野公範、桑原翔大、宮崎洋佑、飯島慶郎、林 茉衣、三原靖葉、正岡 浩、伊藤 司、佐藤皓平、山下智子、岡崎四方、大舘孝治、和氣 玲、稲垣正俊（島根大学医学部精神医学講座）

発達障害を有する患者が、安心できる妊娠・出産・育児を実現するために、医療機関・行政・地域社会が連携をとり支援体制をつくることが重要である。そのなかで、精神科医としてできうことは、発達障害についての情報提供と、発達障害に伴って生じる精神症状に対して適切な薬物療法を行うことであると考えている。今回、われわれは多職種へ疾病理解を促すことで周産期からの支援体制が継続できた発達障害の1症例を経験したので報告した。なお、本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。症例は、30歳代の発達障害を有する妊婦である。当院産科より当科に紹介があり、通院加療を開始した。患者本人の「トリセツ」を作成し、これを通じて多職種へ疾病理解を促したところ、出産後も多職種との関係性は切れることなく支援体制を継続することができた。

42. 修正型電気けいれん療法中に遷延する高振幅徐波を認めた2症例の検討

……上山佑一郎、松田宙也、中山知彦、中瀧理仁、沼田周助（徳島大学病院精神科神経科）

修正型電気けいれん療法（mECT）の有害事象である遷延性発作は、循環不全や低酸素脳症を経て死亡に至ることもある。症例1は30歳代の双極症の男性。強い希死念慮のため、mECTを行った。6回目に脳波上左側に限局する高振幅徐波が遷延し、発作の遷延と考え、ミダゾラムを投与したが不応であり頓挫まで900秒以上要した。後日行った脳波で異常はなく、サイマトロンのリード線の劣化が原因と考えられた。症例2は30歳代の双極症の女性。治療抵抗性のうつ状態にmECTを行った。良好な発作を得るため刺激強度を上げた。4回目、7回目の刺激時に脳波上両側の高振幅徐波が遷延し発作の遷延と考えた。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーを保護に十分配慮した。

43. パーキンソン病およびレビー小体型認知症に伴う精神症状に対するECT—14例のケースシリーズ—

……岡本裕貴¹⁾、千田真友子²⁾、横出晃能¹⁾、竹之下慎太郎²⁾、藤原雅樹²⁾、酒本真次³⁾、高木 学³⁾(1) 岡山大学病院精神科神経科、2) 岡山大学学術研究院医療開発領域精神科神経科、3) 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学)

本誌オープンアクセスに関する規程により、抄録掲載なし。

44. COVID-19後に9ヵ月間カトニアを呈した30歳代男性 に急性期ECTが奏効した1症例

……能美 翔¹⁾, 光井 瞳¹⁾, 山田典宏¹⁾, 山科貴裕²⁾, 松原 敏郎¹⁾, 中川 伸¹⁾(1) 山口大学医学部附属病院精神科神経科, 2) 山口県立総合医療センター神経科)

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 罹患後に精神神経症状が長期に持続することは多いが, カトニアを呈する症例は稀である。症例は知的障害の30歳代男性。X-1年9月にCOVID-19に罹患後, 徐々に亜昏迷, 無言などカトニアとなり, 8ヵ月後のX年5月に当科医療保護入院。急性期電気けいれん療法 (ECT) を計12回実施し, カトニア症状は消失し退院となった。ECTの施行前のSPECTでみられた脳血流低下もECT後改善を認めた。COVID-19後のカトニア発症から3ヵ月以内にECTで加療された症例報告は既報で認めるが, 本症例の結果からCOVID-19罹患後のカトニア症状が3ヵ月以上経過しても急性期ECTが有効で症状と脳機能を回復させる可能性があることが示唆された。本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

45. 反復する気分症状やカトニアに対して電気けいれん療法が奏効した遅発緊張病の1例

……古庵伊吹, 藤井友里, 杉田隆裕, 大賀健市, 増田慶一, 岡田 剛 (広島大学医学部精神科)

症例は70歳代男性。X-8年に抑うつ症状が出現し, 同時にCushing病と診断された。下垂体腫瘍摘出術を施行し抑うつ症状は改善したが, X-6年より再発した。経過中に異所性ACTH産生腫瘍を認め摘出術を施行されたが, その後も抑うつ症状や躁症状に加えて拒絶症, 無言症, 興奮を主体としたカトニアを反復した。ロラゼパムは一時的に効果を示すものの, 薬物療法単独での再発予防は困難であった。遅発緊張病の病態が疑われ, 他の治療への反応が乏しいため, X年12月より電気けいれん療法 (ECT) を開始し, 計15回施行し症状は改善した。その後は維持ECTに移行しおおむね安定して経過している。診断および治療に難渋したが, ECTが急性期および再発予防の両面で有効であったため報告した。症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮した。

46. ロクロニウムを使用したECTのプロトコールの検討

……青木岳也^{1,2)}, 磯村信治²⁾, 新造竜也²⁾, 兼行浩史²⁾(1) 周南病院麻酔科, 2) 山口県立こころの医療センター精神科)

山口県立こころの医療センターでは, 2014年から2024年末までの間にのべ825回のECT実施実績がある。ECTで使用する筋弛緩薬としてはスキサメトニウム (SUX) とロクロニウム (Rb) があり, 同院では当初SUXを使用してきたが, SUX一時出荷停止を機に全面的にRbに切り替えた。しかし, Rb使用ECTに関しては, プロトコールを明確に示した文献がないことに加えて, 単科精神科病院では手術室を有さないために麻酔関連機器などが潤沢ではなく, したがって, 学会ガイドライン通りの実施が困難なこともある。今回, 同院でのRb使用ECTの独自プロトコールを作成し, 有効な発作を得た409回のECTにおいて, 使用した麻酔薬・Rb・スガマデクス (Rb拮抗薬) の量を文献推奨量と比較・検討した。また, SUX使用ECTと比較したRb使用ECTの利点・欠点について, 同院での実施経験をもとに報告した。本発表については個人が特定されないように配慮し, 内容に関して同院倫理委員会の承認を得た。

47. 転居支援などの環境調整を要したためこみ症の1例

……近藤 希^{1,2)}, 松本洋一郎²⁾, 大盛 航^{2,3)}, 増田慶一²⁾, 岡田 剛²⁾(1) 広島市立北部医療センター安佐市民病院精神科, 2) 広島大学病院精神科, 3) 国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター)

症例は60歳代前半の女性。独居生活で自宅は衣類やごみなどが堆積し, 悪臭や害虫が発生した。近隣住民からの苦情を受け自治会が介入したところ希死念慮が高まり, ベンゾジアゼピン系薬剤の過量服薬後, 広島大学病院に救急搬送された。精神科入院中にためこみ症と診断し, 転居支援や訪問看護導入などの介入を要した。ためこみ症はDSM-5で強迫症および関連症群の1つとして独立した疾患であり, 物を捨てる際の苦痛の結果として居住空間に所有物が散乱・堆積し, 生活機能が著しく障害される。薬物療法や曝露反応妨害法だけでは改善が得られにくく, 状態の適切な理解, 周囲支援者の協力, 動機づけといった対応の重要性が指摘されており, 本症例で行った介入について文献的考察を加え報告した。なお, 本症例報告に際して, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

48. 心理検査に基づく自己理解が問題行動改善のきっかけとなった、神経性無食欲症とアルコール依存症候群が併存した若年成人の1例

……森 祥子¹⁾, 田中賀大¹⁾, 薬師寺晋¹⁾, 武藤 遥¹⁾, 井上 蓉子¹⁾, 高橋 優¹⁾, 宮崎哲治¹⁾, 村上伸治¹⁾, 赤松祐美²⁾, 谷 英俊²⁾, 石原武士^{1,2)} (1) 川崎医科大学精神科学, 2) 川崎医科大学附属病院臨床心理センター)

近年、摂食障害や依存症の困難例では、治療中に発達特性に気づかれることがしばしばある。症例は、拒食と問題飲酒による低体重と高度肝機能障害を認め、救急搬送と入退院をくり返して退職に至った20歳代女性である。女性は、幼少期から手がかからない子だった。問題行動に対する本人の「普通である」との認識は修正困難だった。心理検査(WAIS-IV, AQ-J, CAARS, TEG3)では、人への興味関心の弱さ、空間認知の困難さ、自由奔放さなどが認められた。心理結果を慎重かつ丁寧に解説し、自己理解が深まるとともに治療が進み、再就職を果たした。発達特性に関する自己理解が人生の羅針盤になったと考えられた。なお、本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護には十分に配慮した。また、本演題に関して開示すべき利益相反関係にある企業はない。

49. 不眠症治療におけるダリドレキサントの有効性について

……森 昭博¹⁾, 岡田祐希²⁾, 佐々木皓大¹⁾, 上野祐介¹⁾, 野口勝宏¹⁾, 樋笠直哉¹⁾, 木戸瑞江¹⁾, 石川一朗¹⁾, 森 崇洋¹⁾, 角 徳文³⁾, 中村 裕¹⁾ (1) 香川大学医学部精神神経医学講座, 2) 香川大学医学部地域連携精神医学講座, 3) 香川大学医学部臨床心理学科精神医学)

不眠症状は人口の10~20%が経験する一般的な健康問題である。かつて睡眠薬といえばBZ受容体作動薬であり、不眠症に対して頻用されてきたが転倒リスク・記憶障害・せん妄などの認知機能への影響、さらには依存形成や離脱症状などの問題があった。近年登場したメラトニン受容体作動薬やオレキシン受容体拮抗薬は、従来薬と同等の効果をもちながら有害事象リスクが低い。新規オレキシン受容体拮抗薬であるダリドレキサントの治療効果について、不眠を訴える90歳代の患者について検証した。睡眠導入効果や早朝の眠気の残存について、レンボレキサントと比較し症状の改善がみられた。この症例は従来治療で不十分な不眠治療に対して、ダリドレキサントが有効である可能性を示唆している。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

50. 抗うつ薬の副作用制限下でrTMSを併用し改善を得た高齢者うつ病の1例

……清水崇禎, 佐藤 仁 (医療法人社団五色会こころの医療センター五色台)

抗うつ薬の副作用により薬剤性肝障害歴を有し、治療継続が困難となった高齢者うつ病の1例に対し、rTMS療法を導入し改善を得た症例を経験した。症例は60歳代半ばの女性。倦怠感や意欲低下が持続し、うつ病と診断されたが、内服による肝機能悪化を契機に通院中断していた。抑うつ気分・希死念慮・倦怠感・意欲低下が増悪し、入院となり新規にミルタザピン15mgを導入するも口渇・胃部不快感が持続し増量困難であった。薬物療法の限界をふまえ、rTMSを導入。HAM-DやBDI-IIスコアの改善と抑うつ感の低減・社会的活動の再開が得られた。副作用の出やすい高齢者うつ病における薬物療法の制限下で、少量薬物維持とrTMS併用により奏効を得た例であり、副作用リスクを最小限に抑えた個別化治療戦略の有用性を報告した。本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。

51. うつ病の治療中にreversible cerebral vasoconstriction syndrome (RCVS)を発症した1例

……新川甲太, 樋口文宏, 中川 伸 (山口大学医学部精神科神経科)

【目的】複数の抗うつ薬併用中にreversible cerebral vasoconstriction syndrome (RCVS)を発症し、その後の抑うつ症状に対してquetiapineが奏効した症例を報告した。【症例】60歳代女性。反復性うつ病に対しescitalopram, aripiprazoleで加療中にmirtazapineを追加した3日後、雷鳴頭痛とくも膜下出血を発症。画像上、可逆性の脳血管攣縮からRCVSと診断し、抗うつ薬をすべて中止した。抑うつ症状に対し急性期ECTは無効だったが、適用外使用の同意を得てquetiapineを使用したところ寛解に至った。【考察】Mirtazapine追加によるセロトニン作動性の増強がRCVSの誘因と考えられた。RCVS後のうつ病治療でECTが奏効しない場合、血管攣縮の再発リスクを考慮すると、セロトニン作動性の少ないquetiapineが安全かつ有効な選択肢となりうる。【倫理的配慮】本症例報告に際して、発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している。